

主成分分析法による形容詞の活用分析：
『枕草子』を資料として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1990-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1524

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



主成分分析法による形容詞の活用分析

——『枕草子』を資料として——

吉 田 光 浩

1 はじめに

形容詞は、その語の末尾に一定の音形態〈一(し)く・一し・一(し)き・一(し)けれ〉などをとることによって、いわば形態的にひとつの閉じられた系を成している。そして、そのような外形上の特色は、同時にその系の内に属する語と外に属する語との語彙的・文法的な次元の相違、すなわち、意義上・文法機能上のひとつの境界を外面的に示すものとなっている。したがって、形容詞語彙に属する個々の語は、動詞語彙や名詞語彙など、その外部に属する語彙構成要素との比較のうえで、概ね一様性をもつものといえる。しかしながら、翻って、その内部の構成要素個々に目を向けると、なかには動詞や名詞と語根を共有するものもあり、ひとくちに形容詞といっても各々の語は、その閉じられた系の内部において、とりどりの多様性を有していることがわかる。そのために、活用形態の現われ方も各々の語性によって大きく異なり、それらが全体として形容詞語彙のもつ機能的空間を構成しているものと考えられる。

本稿では、形容詞の活用形態の現われ方を、統計的手法を用いて量的に捉えることにより、形容詞語彙のもつ構文機能上の広がりについて考察を試みる。

無論、形容詞の活用形態の現われ方が、直ちにその作品における形容詞の意味・用法のあり方に直結するものではない。しかしながら、いわゆる形容詞本活用〈一(し)く・一し・一(し)き・一(し)けれ〉とされる諸形態は、基本的には、動詞に多くみられるような助動詞に承接せられるための準備形態で

はなく、一つの活用形が担当する用法の範囲もある程度の限定があるために、活用形の異なりが用法の異なりに、比較的対応しやすいということはできそうである。そのために、形容詞の場合には、活用形態レベルでの検討結果が、用法レベルでの検討結果との間に極めて大きな乖離を生ずるということはないものと予想される。

また、我々が用言の用法や構文機能を知るための第一次的な手掛かりは、文現象上に顕現する活用「形態」であり、そのレベルでは、用例の分類にあたって恣意的な解釈の入り込む余地はほとんどないといえる。統計的な分析において、より適正な結果を得るためには、先ずデータを得る段階で、そのような恣意的解釈の要素が入り込む余地を小さくして、できるかぎり所与としてのデータを前提とすることが望ましい。尤も、更に詳しい分析を試みようとするれば、各々の用法のレベルでの分析が必要となってくるであろう。しかしながら用法の多様性に比べ、活用形態がそれに対応し切れるだけのフレキシビリティをもたないために、このレベルでは、分析者個人（あるいは複数人であっても）の判断によって用例の分類が行なわれやすく、もはや所与としてのデータを望むことは困難になってくる。

したがって、データの統粋性を重視しようとするならば、意味・用法レベルでの検討の前に、活用形態レベルでの調査をしておくことが必要であろう。このような意味で、活用形態の出現状況をここで一旦把握、検討しておくことは、後の用法・意味の分析の前段階として、決して無意味なことではあり得ない。

2 分析の方法

ひとつの資料に現われる形容詞各語のそれぞれの活用形は、表現の意図に従って、固より自由に用いられているはずである。にもかかわらず、活用形態の出現状況について量的な側面からみた場合に、ある形容詞は、ある活用形で現われやすく、また別の活用形では用いられ難いという偏向現象がみられ、そこ

2

にいくつかの出現率のパターンを考えることができるようである。ここでは、そのパターンの全体的な構造を把握するために、電子計算機を用いて、多変量

解析の一手法である相関分析および主成分分析¹⁾の応用を試みた。

具体的に本稿においては、『枕草子』²⁾にみられる形容詞のうち、総使用度数が10以上のもの71語³⁾について各活用形態の使用度数と総使用度数を調査し、(表一参照)その総使用度数に占める各活用形態の使用度数の割合(以下、出現率)を算出する(表二参照)。その際、分析法への適性を考えて、本活用形4種(連用形—音便形を含む—・終止形・連体形—音便形を含む—・已然形)の出現率については、各々個別の変数とした。また、補助活用<カリ活用>とされるものについては、ここでは考慮外のものとするのもひとつのあり得る立場であろうが、その諸形態のもつ機能が平安期の和文系資料においては「おほし(多)」などの若干の例外がみられるものの、基本的には助動詞に承接せられるためのものであることがほとんどであるという特殊性をもつ故に、用法上ある程度ひとつのまとまりを成しているものと見做し得ること、さらに、各活用形(未然形、連用形、連体形、已然形、命令形)とも用例数が少なく、それらを個別に算出した場合には出現率もほとんど問題とならないほど小さくなってしまふこと、などの諸点を鑑みて、各カリ活用形全体をまとめてひとつの変数をたてることとした。

したがって、形容詞本活用四種類に補助活用形もひとつに加えて、71語の形容詞について5次元の変数(活用形態の出現率)データをもとに、各活用形間の相関関係について考察したうえで、主成分分析法による解析の結果を2次元グラフに描くことによって、『枕草子』にみられる主要形容詞の活用形態の出現パターンについて考察する。⁴⁾

1) 主成分分析法は、多くの変数をもつデータについて、できるかぎり元のデータのもつ情報を損なわないように変数の次元を総合し減少させることによって、データの全体的な構造を把握しやすくする分析法である。

2) 日本古典文学大系『枕草子』岩波書店(1958)を資料とする。猶、語の単位認定については、松村博司編『枕草子総索引』右文書院(1967)の基準に従った。

3) 活用形態の用法が特殊な「おなじ」・「おほし(多)」についても本稿では敢えて便宜的な処置を採らずに調査の対象とした。従って、この二語については、活用形の名称と実態が整合しない。

4) 分析には、統計計算ライブラリー(NEC)を使用した。

表一 『枕草子』主要形容詞活用表

(各活用形使用度数および総使用度数)

	連用形	終止形	連体形	已然形	補助活用形	総使用度数
あいなし	6	4	0	0	0	10
あかし(赤)	7	0	11	0	0	18
あかし(明)	4	0	11	0	0	15
あさまし	15	6	4	1	3	29
あし	15	9	10	3	6	43
あたらし(新)	5	0	5	0	1	11
あつし(暑)	4	0	8	1	1	14
あやし	17	20	23	3	3	66
あをし	5	0	13	0	0	18
いたし(甚)	41	0	0	0	0	41
いとほし	4	7	3	6	0	20
いみじ	303	4	25	3	7	342
うつくし	0	11	3	0	0	14
うらやまし	2	6	1	4	0	13
うるはし	15	2	6	0	0	23
うれし	11	15	7	3	3	39
おそし	5	2	4	0	1	12
おそろし	7	14	10	2	2	35
おなじ	5	40	0	0	0	45
おほし	42	0	0	0	28	70
おぼつかなし	4	0	3	0	3	10
おもしろし	3	3	4	0	2	12
かしがまし	4	3	3	0	0	10
かしこし	12	5	10	1	4	32
かたはらいたし	1	4	5	0	0	10
くちをし	8	9	12	4	5	38
くらし	9	0	9	1	3	22
くるし	4	2	4	2	1	13
くろし	10	0	13	0	0	23
こころにくし	2	6	4	0	1	13
こころもとなし	12	5	3	2	1	23
こし	6	0	23	0	1	30
さむし	3	1	7	0	0	11
さわがし	7	3	5	1	0	16
しろし	23	0	52	0	1	76
すさまじ	2	5	5	2	1	15
せばし	4	2	4	1	0	11
たかし	30	2	7	0	0	39

主成分分析法による形容詞の活用分析

	連用形	終止形	連体形	已然形	補助活用形	総使用度数
たのもし	3	4	3	0	1	11
たふとし	6	4	7	0	0	17
ちかし	55	0	10	0	1	66
ちひさし	5	0	14	1	0	20
とし	64	0	1	0	1	66
とほし	11	0	13	0	2	26
ながし	14	0	9	0	1	24
なし	89	50	81	14	20	254
なまめかし	4	4	3	0	0	11
にくし	12	31	20	18	8	89
ねたし	10	6	5	1	3	25
はづかし	4	8	9	2	1	24
はやし	10	0	1	0	1	12
ひさし	29	2	0	0	1	32
ひろし	8	0	3	1	0	12
ふかし	11	0	3	0	0	14
ほそし	10	0	6	0	0	16
みぐるし	2	10	8	1	1	22
みじかし	6	0	8	1	1	16
むづかし	3	2	2	1	2	10
めづらし	10	4	3	0	0	17
めでたし	22	54	40	14	8	138
やすし	1	0	7	0	4	12
やむごとなし	4	0	11	0	2	17
ゆかし	0	4	6	2	4	16
よし	70	38	53	4	12	177
よろし	6	1	13	0	2	22
わかし	5	0	36	1	1	43
わびし	8	4	7	5	3	27
わりなし	7	3	3	1	0	14
わるし	2	4	7	0	1	14
わろし	5	11	13	4	5	38
をかし	58	204	64	70	26	422
合 計	1211	638	786	181	190	3006

表一 2 『枕草子』主要形容詞活用形出現率表
 (各活用形使用度数／総使用度数*100=出現率)

	連用形	終止形	連体形	已然形	補助活用形
あいなし	60.0	40.0	0.0	0.0	0.0
あかし(赤)	38.9	0.0	61.1	0.0	0.0
あかし(明)	26.7	0.0	73.3	0.0	0.0
あさまし	51.7	20.7	13.8	3.4	10.3
あし	34.9	20.9	23.3	7.0	14.0
あたらし(新)	45.5	0.0	45.5	0.0	9.1
あつし(暑)	28.6	0.0	57.1	7.1	7.1
あやし	25.8	30.3	34.8	4.5	4.5
あをし	27.8	0.0	72.2	0.0	0.0
いたし(甚)	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
いとほし	20.0	35.0	15.0	30.0	0.0
いみじ	88.6	1.2	7.3	0.9	2.0
うつくし	0.0	78.6	21.4	0.0	0.0
うらやまし	15.4	46.2	7.7	30.8	0.0
うるはし	65.2	8.7	26.1	0.0	0.0
うれし	28.2	38.5	17.9	7.7	7.7
おそし	41.7	16.7	33.3	0.0	8.3
おそろし	20.0	40.0	28.6	5.7	5.7
おなじ	11.1	88.9	0.0	0.0	0.0
おほし	60.0	0.0	0.0	0.0	40.0
おぼつかなし	40.0	0.0	30.0	0.0	30.0
おもしろし	25.0	25.0	33.3	0.0	16.7
かしがまし	40.0	30.0	30.0	0.0	0.0
かしこし	37.5	15.6	31.3	3.1	12.5
かたはらいたし	10.0	40.0	50.0	0.0	0.0
くちをし	21.1	23.7	31.6	10.5	13.2
くらし	40.9	0.0	40.9	4.5	13.6
くるし	30.8	15.4	30.8	15.4	7.7
くろし	43.5	0.0	56.5	0.0	0.0
こころにくし	15.4	46.2	30.8	0.0	7.7
こころもとなし	52.2	21.7	13.0	8.7	4.3
こし	20.0	0.0	76.7	0.0	3.3
さむし	27.3	9.1	63.6	0.0	0.0
さわがし	43.8	18.8	31.3	6.3	0.0
しろし	30.3	0.0	68.4	0.0	1.3
すさまじ	13.3	33.3	33.3	13.3	6.7
せばし	36.4	18.2	36.4	9.1	0.0

	連用形	終止形	連体形	已然形	補助活用形
たかし	76.9	5.1	17.9	0.0	0.0
たのもし	27.3	36.4	27.3	0.0	9.1
たふとし	35.3	23.5	41.2	0.0	0.0
ちかし	83.3	0.0	15.2	0.0	1.5
ちひさし	25.0	0.0	70.0	5.0	0.0
とし	97.0	0.0	1.5	0.0	1.5
とほし	42.3	0.0	50.0	0.0	7.7
ながし	58.3	0.0	37.5	0.0	4.2
なし	35.0	19.7	31.9	5.5	7.9
なまめかし	36.4	36.4	27.3	0.0	0.0
にくし	13.5	34.8	22.5	20.2	9.0
ねたし	40.0	24.0	20.0	4.0	12.0
はづかし	16.7	33.3	37.5	8.3	4.2
はやし	83.3	0.0	8.3	0.0	8.3
ひさし	90.6	6.3	0.0	0.0	3.1
ひろし	66.7	0.0	25.0	8.3	0.0
ふかし	78.6	0.0	21.4	0.0	0.0
ほそし	62.5	0.0	37.5	0.0	0.0
みぐるし	9.1	45.5	36.4	4.5	4.5
みじかし	37.5	0.0	50.0	6.3	6.3
むづかし	30.0	20.0	20.0	10.0	20.0
めづらし	58.8	23.5	17.6	0.0	0.0
めでたし	15.9	39.1	29.0	10.1	5.8
やすし	8.3	0.0	58.3	0.0	33.3
やむごとなし	23.5	0.0	64.7	0.0	11.8
ゆかし	0.0	25.0	37.5	12.5	25.0
よし	39.5	21.5	29.9	2.3	6.8
よろし	27.3	4.5	59.1	0.0	9.1
わかし	11.6	0.0	83.7	2.3	2.3
わびし	29.6	14.8	25.9	18.5	11.1
わりなし	50.0	21.4	21.4	7.1	0.0
わるし	14.3	28.6	50.0	0.0	7.1
わるし	13.2	28.9	34.2	10.5	13.2
をかし	13.7	48.3	15.2	16.6	6.2
平 均	37.6	18.4	33.1	4.5	6.4

* 小数第 2 位を四捨五入

このようにして得たデータを元に各活用形の出現率についての相関係数の検討、および主成分分析法を適用することの可否については、データの性質上、今後の検討が必要であり、必ずしも現在のところその有効性について確証があるわけではない。しかしながら、少なくとも形容詞語彙のもつ構文的機能の広がりを経験的に捉えるための一つの試みとして無駄ではないであろうと考える。

3 活用形出現率の相関関係

直接、主成分分析グラフの考察にはいる前段階として、本節では、主要形容詞全体の各活用形出現率の相互関係を示す相関係数について検討する。相関係数は、本稿の場合、次元数の多いデータを瞥見しただけでは十分に把握しきれない各活用形間の総合的な相互関係を知るために、ある程度有効な示唆を与えてくれるものである。

『枕草子』にみられる主要形容詞の各活用形出現率は、各語の総使用度数中に占める割合であるために、その相互関係は、ある活用形の出現率が大きくなれば、他の活用形の出現率が相対的にその影響を受けて、ある程度小さくなりやすいという傾向があることは否めない。したがって、5次元データから導かれた各活用形間の関係を示す相関係数も、概して負の数値になりやすいという傾向をもつ。相関の有無をどの程度の数値で認めるかということは、今後の研究の集積に俟たねばならないが、とりあえずここでは、各活用形の出現率の相互が負の相関をもちやすい傾向にあるということを前提として、幾つかの活用形間の相関係数について考察しておくことにする。(表一3参照)

表一3 『枕草子』主要形容詞活用形出現率間の相関係数

	連用形	終止形	連体形	已然形	補助活用形
連用形	1.0000				
終止形	-0.52706	1.0000			
連体形	-0.46871	-0.38067	1.0000		
已然形	-0.35677	0.30826	-0.22130	1.0000	
補助活用形	-0.19951	-0.13046	-0.53993*10 ⁻¹	0.33346*10 ⁻¹	1.0000

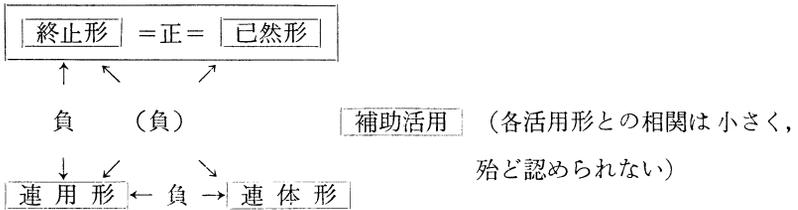
- ① 全体的に、非常に強い相関性を示す数値はみとめられない。そのうち比較的大きな相関係数⁵⁾をもつ活用形態は、終止形と連用形である(-0.52706)。この数値で負の相関があると判定し得るとすれば、総体的に、連用形の出現率の大きいものは、終止形の出現率が比較的小さくなりやすいという傾向をもち、逆に終止形の出現率の比較的大きいものは連用形の出現率が小さくなりやすいという傾向があるといえそうである。主要形容詞71語全体の活用形態別平均出現率の大きさから言えば、それが最も大きいものは連用形(約37.6%)であり、それに次ぐものが連体形(約33.1%)、終止形は3番目で連用形の約1/2に満たない数値(18.4%)であるから、連用形の出現率の影響をより大きく受けやすいものは、一般に終止形よりも出現率の大きい連体形であっても構わないことになる。しかしながら、連体形—連用形間の相関係数(-0.46871)は、終止形—連用形間のそれよりも小さい数値にとどまっている。このことは、単純に出現率の大きさのみで活用形間の相関性の大きさを測ることができないことを意味しているものと思われる。
- ② 一方、連体形—終止形間の相関係数(-0.38067)は、終止形—連用形間および連体形—連用形間に次ぐ負の数値(これを大きいと判断するか否かは先にも述べたように今後の問題であろう)を示しており、連体形と連用形との関係程ではないものの、全く相関性が無いとは言えない。ある程度一方の出現率の大なることが他方の出現率の小なることに繋がりやすい傾向をもつといえそうである。すなわち、終止形—連用形・連体形—連用形・連体形—終止形の順に、若干なりとも一方の活用形態の現われやすさが他方の活用形態の現われ難さに繋がる傾向をもつものと考えて良いのではなかろうか。
- ③ 数値としてはさほど大きいものとは言えないが、已然形—終止形間は、正の数値(0.30826)を示している。先にも述べたように各活用形の出現率は互いに負の相関をもちやすい傾向があることを考慮すると、已然形—

5) 以下、本節において相関係数の大小についての記述は当該数値の絶対値の大小を意味する。

終止形間には、実際にはこの数値よりも大きな相関を認めるべきではなからうか。已然形は、平均出現率が約4.5%であり、連用形との間に連体形—終止形間に次ぐ負の相関係数(-0.35677)をもつが、連体形との間では、係数数値がかなり小さくなっている(-0.22130)。すなわち、負の相関をもちやすい傾向にあることを考慮すると、已然形は、終止形の出現率が大きい語に現われやすいということができ、連用形の現われやすい語には、どちらかといえば現われ難く、また、連体形の現われやすさとは、殆ど無関係であると考えらるべきではなからうか。

- ④ なお、補助活用形は主要形容詞の平均出現率が約6.4%であり、他のどの活用形とも相関が小さく、若しくはほとんど認められないといってよいであろう。

したがって、以上の考察を前提として、『枕草子』にみられる主要形容詞の活用形出現率の相互関係を図示するならば、次のようになるものと思われる。



* () は相関が非常に小さいことを示す

このことから、形容詞の活用形は、出現量の面からみれば、終止形と已然形は、互いに共存的に現われやすいが、この両活用形は、連用形とは背離しやすい傾向をもち、一方、連用形は、これら両活用形および連体形と背離しやすく、連体形は、終止形、連用形と背離しやすい傾向があることを推測することができるであろう。また、補助活用形は、概ね他の活用形の出現量に無関心であると言い得る。⁶⁾

活用形間に、見出し得るこのような相互関係について敢えて形態と用法との

6) 本稿では、一応、少なくとも $|\pm 0.3|$ 以下の数値に対しては、相関を認めないという立場で記述したが、厳密な相関性の有無の判断基準の設定については今後の研究の集積に俟たねばならない。

概括的な見方が許されるならば、これらは偶然の理由によって齎されたものではなく、むしろ必然の結果とみるべきものと思われる。例えば、終止形は本質的に文の述語であることをその基本とする形態であるとするに問題はなからう。また、已然形は、「ば・ど・ども」などの接続助詞を下接させて条件節中の述語となる用法をその中心としており、また、「こそ」に応ずる終止述定を果たす用法をも有している。いずれも述語的用法をその基本とする形態と見做すことができるであろう。すなわち、相互に述語性が強い活用形であるというその性質の近似性がこのような共存的な相関関係となって現われたものと考えてよいのではなからうか。

また、連用形と連体形とはもちろん連用中止法のような中間的なものや、連体形が係り結びの結びを構成する場合などは別として、一般に他の構文要素に対して「係る」立場に立つことが多く、本質的には終止形・已然形のように他の構文要素を「受ける」述語的な用法とは対照的であり、そこにこれらの活用形が終止形・已然形と、少なくとも共存的には現われ難いことの一因を窺うことができる。一方、連用装定と連体装定は、同じ装定であっても、基本的には用言的な要素（コト的な対象）に対する装定と体言的な要素（モノ的な対象）に対する装定であるという質的な異なりが、概ねにおいてみとめられることを考えれば、この両活用形が必ずしも共存的に現われない事はおのずから理解されるであろう。

ここで考察したことは、データを瞥見した程度では必ずしも自明的なものとなっていないが、以上のような相関係数についての検討を元に、『枕草子』の主要形容詞には終止形と已然形の出現率が比較的大きい形容詞、連用形の出現率が比較的大きい形容詞、および連体形の出現率の比較的大きい形容詞、以上、少なくとも三つの出現率パターンがみられることを、ある程度、推測することができるようである。

4 形容詞活用形出現率グラフ

前節においては、各活用形出現率の相関係数のあり方から、『枕草子』にみ

られる主要形容詞が、語によって、他の構文要素を「受ける」機能を大きくもつ終止形・已然形が比較的現われやすい述語的なものと、他の構文要素に「係る」機能を大きくもつ装定的なもの、そして後者については、連用形に卓越するものと連体形に卓越するものとに分けられる可能性があることを考察したが、そのような活用形態の出現パターンが、具体的にはどのような語に、どの程度で看取されるかということを考えておく必要がある。しかしながら、71語全てについて逐一個々の活用パターンを検討してゆくことは、能率的ではなく逆に微小な部分にとらわれて、形容詞語彙の全体像を見失うことにもなりかねない。したがって本節においては、先に述べた主成分分析法を用いて、5次元の活用形出現率のデータを2次元グラフにまとめることによって、その分散状態から主要形容詞の出現パターンのあり方を考察してゆくことにする。(グラフー1参照⁷⁾)

このグラフは、5次元空間に存在する71個の点の散布状態を知るために、もっとも広く点が分散している2次元平面を電算機に選択させて、その平面にデータを集約し、グラフ化したものである。したがって、縦軸、横軸ともその点の分散状態を元に決められたものであるので、具体的にその数値がどの変数を反映するものであるかということは、一概に言い難い、また、2次元グラフでは点と同じ位置に存在しても、必ずしもその5次元の変数の数値は一致しないことがある。しかしながら、もっとも広い分散面を示したものであるゆえ、全体的な活用形出現率のパターンを知るためには大きな影響はないものと思われる。

全体的には、上方(第一象限)「こし」・「やすし」・「わかし」および、右下方(第四象限)「いたし(甚)」・「とし」・「ひさし」、左下方(第三象限)「いとほし」・「うらやまし」・「をかし」などの語が分布している部分を頂点とする三角形の中に分散しているといえる。分散の極を成すこれらの形容詞、およびそのほぼ中心に位置する形容詞、「かしこし」・「よし」・

12 「せばし」について、グラフと活用形出現率との対照を容易にするため、先に

7) グラフー1は電算機によってプリントされたものを元に、理解の便を図って合成したものであり、実際の打点の位置は各語の中央付近である。

掲げた表一から当該関係箇所を抜粋し、示しておく。(表一4、表一5参照)

表一4

(各活用形使用度数および総使用度数)

	連用形	終止形	連体形	已然形	補助活用形	総使用度数
こし	6	0	23	0	1	30
やすし	1	0	7	0	4	12
わかし	5	0	36	1	1	43
いたし(甚)	41	0	0	0	0	41
とし	64	0	1	0	1	66
ひさし	29	2	0	0	1	32
いとほし	4	7	3	6	0	20
うらやまし	2	6	1	4	0	13
をかし	58	204	64	70	26	422
かしこし	12	5	10	1	4	32
せばし	4	2	4	1	0	11
よし	70	38	53	4	12	177

*アミ部は当該活用形の使用度数が他の活用形よりも、比較的高い数値であることを示す。

表一5

(各活用形使用度数/総使用度数=出現率)

	連用形	終止形	連体形	已然形	補助活用形
こし	20.0	0.0	76.7	0.0	3.3
やすし	8.3	0.0	58.3	0.0	33.3
わかし	11.6	0.0	83.7	2.3	2.3
いたし(甚)	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
とし	97.0	0.0	1.5	0.0	1.5
ひさし	90.6	6.3	0.0	0.0	3.1
いとほし	20.0	35.0	15.0	30.0	0.0
うらやまし	15.4	46.2	7.7	30.8	0.0
をかし	13.7	48.3	15.2	16.6	6.2
かしこし	37.5	15.6	31.3	3.1	12.5
せばし	36.4	18.2	36.4	9.1	0.0
よし	39.5	21.5	29.9	2.3	6.8

*アミ部は当該活用形の出現率が他の活用形よりも、比較的高い数値であることを示す。

このことから、『枕草子』の主要形容詞の活用形出現率は、概ね、連体形に

主成分分析法による形容詞の活用分析

卓越し終止形をほとんどたないパターン（連体形卓越型）と、連用形に卓越し他の活用形をほとんどたないパターン（連用形卓越型），および，比較的終止形と已然形が多く現われるパターン（終止・已然形型），との三パターンを各々の極として，それらの極を結ぶグラフ上の三角形の内部空間に分散していることが理解されるであろう。

活用形式の別で言えば，グラフ左上から右下に伸びた対角線の，概ね下側にシク活用形容詞（○印），上側にク活用形容詞（下線）が分布している。

対角線の下方は，比較的終止・已然形型のもの，すなわち述語的な用法に用いられる活用形が多く現われるものが分布し，上方は終止形・已然形のような述語的な活用形よりも連体修飾的な用法に卓越するものが分布していることを考えれば，ク活用形容詞は連体形卓越型のものが多く，シク活用形容詞の場合には終止・已然形型のものが多いとすることができる。すなわち，ク活用形容詞のもつ活用形出現パターンとシク活用形容詞がもつ活用形出現パターンとは概ねにおいて対照的な傾向をもつ。このことは，ク活用形容詞とシク活用形容詞のもつ構文機能の重心が，ある程度異なるものであることを意味しているものと考えることができるであろう。

形態と意味との一元的解釈は，十分な用意がないためここでは避けるが，一般に，属性形容詞は連体形卓越型の活用パターン域を中心に分布しており，感情形容詞あるいは情意的な評価を示す形容詞は終止・已然形型の活用パターン域に分布しているようである。ク活用・シク活用と意味との対応については，既に山本俊英（1955）の指摘をはじめ，多くの論考が重ねられてきた。西尾光雄（1979）では，『源氏物語』にみられる形容詞のうち情意的な意味をもつものが述語的であり，色彩形容詞など属性的意味をもつものは連体修飾的であることが指摘されているが，『枕草子』においても同様の傾向を指摘することができる。したがって，このことは，これら両作品にとどまらず，より広く平安期の和文系資料に現われる形容詞語彙の基本的な性格の一端を示しているものかも知れない。

『枕草子』一個の考察からこれ以上を述べることはできないが，語内部に述語形とでも言うべき終止形の音形態と同じく一しを，既に有しているシク活

用形容詞が、述語的な活用形の出現率が大きく、そのような音形態を元来保有しないク活用形容詞が、述語的な活用形で用いられることが比較的少ないということは、形容詞の活用について考える場合に極めて重要な示唆を与えてくれているものと思われる。

5 おわりに

本稿において述べてきたことは、あくまでも『枕草子』一作品にみられる形容詞についての考察であり、その点で文体的な考察の域を出ないものである。しかしながら、西尾光雄氏の『源氏物語』における論考にもみられるように、同時代の和文系資料においては、程度の差こそあれ、やはり同様の現象を見出し得るものと推測される。また、若干の例外はみとめられるもののク活用・シク活用という活用形式の異なりが、文法機能の重心の異なりにある程度対応していることは、活用形式上の対立、すなわち形態との対応という観点からのみではなく、感情形容詞・感覚形容詞、色彩・次元などの表現に供する属性形容詞といった、より深くは、意味のレベルにおいても活用形の出現パターンが大きく関与していることをグラフから読み取ることができるであろう。いずれ稿を改めて述べたいと思う。

参考文献

- 山本俊英(1955)「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23
 東辻保和(1971)『『枕草子』の語彙からみた感情表現』『月刊文法』3の4
 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
 川端善明(1979)『活用の研究Ⅱ』大修館書店
 西尾光雄(1979)「源氏物語の形容詞について」『東京女子大学日本文学』51
 山口仲美(1982)「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学4』明治書院
 山口佳紀(1985)『古代日本語文法の成立の研究』有精堂
 平澤洋一(1986)「枕草子と情緒性の意味素性」『国語語彙史の研究7』和泉書院

付記 本稿は、前任校和歌山工業高等専門学校において、電気工学科瀬戸幸作教授、学生向井賢光君の御協力を得て着手したものを再検討し、まとめ直したもの

である。両氏に感謝の意を申し上げたい。

また、内容について誤謬があれば、全て筆者の責であることを申し添えておく。

